佳作

未来へ繋げる、美しい自然

新潟県立村上中等教育学校
２年　中野　詩

未来の自分に問いたいことがある。故郷の山の植物や生き物は、変わらずに残っているだろうか。私は、あの美しい自然を守ることができているのだろうか。

小学２年生の夏、私は、新保岳というブナ林の美しい山に登った。山に興味はなかったが、家族に誘われ登ることにした。登山口に立ったとき、鮮やかな緑の色に目を奪われた。普段住んでいる所からは見ることのできない濃い緑色の植物。またそこを住み家とする生き物の多様さにも驚いた。そして、山を登って行くと、私は木々の間から降りそそぐ木もれ日に息を飲んだ。とても繊細で、言葉に表すことができないほど美しかった。どこからか聞こえてくる鳥のさえずりは、耳に心地よく響いた。やっとの思いで頂上に着くと、目の前にはどこまでも水平線が広がっていた。その日、私は今まで触れることのなかった美しい自然に心を揺さぶられ、すっかり山のことが好きになっていた。

初めての登山の後、私は自然や木のことについて興味を持ち、植樹やごみ拾いなどの自然に関する活動に、積極的に参加するようになった。活動を通して、自然への学びが深まり、植物や生き物について新たな発見を得ることもできた。また、活動の中で森林に携わるお仕事をされている方たちから、お話を聞く機会も何度かあり、ますます自然への興味がわいた。そのころの私は、登山をする前の私とは違い、自然を愛し、全力で楽しんでいた。

小学校でも、自然に関わる活動をすることが何度もあった。小学３年生からは、毎年新保岳にブナの苗木、水、スコップをみんなで分担してかついで登った。そして苗木を新保岳の中腹あたりに植えた。またあるときには、学校林に自分たちで組み立てた巣箱を設置した。原木にシイタケの種駒を埋め込み、それらを学校の裏庭で栽培したこともある。学校でさまざまな体験をしたことで、私は自然に飽きることなく関わり続けることができた。

しかし、小学５年生のとき、少子化の影響で小学校が統合してしまった。すると、今まで行ってきた自然に関する活動が少なくなってしまった。私はとても寂しく、悔しい思いでいっぱいだった。だが、自然への熱が下がることはなかった。

小学生のころから、ずっと自然に関わる活動に取り組んできたが、歳を重ねるごとに、一緒に活動してきた同年代の仲間の数が減ってしまった。同級生を

活動に誘ってみても「疲れる」「汚れそう」などの理由で断わられてしまうことが多かった。若い世代の参加者が少なかったことで、活動の規模も小さくなっていった。それでも私は、自然を守りたいと決心して、活動に取り組むことをやめなかった。

山は、誰かが木を伐採したり、植樹をしたり管理をしないと、荒れてしまう。山が荒れると、森は暗くなり、植物にも日光が届かずに枯れてしまい、それらを餌や住み家とする生き物も、生きていくことができなくなってしまう。自然のサイクルが止まってしまうのだ。私の故郷の山が、そんな姿になるのは嫌だし、とても悲しい。そのような状況を避けるためにも、まずは自分から行動し、それを周りの人に広めていくことが必要だ。一人の力では無理でも、みんなに自然のことを伝え、興味を持ってもらうことで、協力してくれる人は増えるはずだ。未来の私には、それができているのだろうか。

未来の自分は、自然とはかけ離れた仕事をしているのかもしれない。しかし、それでもいい。一番大切なのは、自分が愛した美しい自然を、山を見守り、それらのために動くことだ。誰かが動き始めるのを待ってからでは遅すぎる。私を支え、見守ってくれた自然に、山に感謝し、恩返しがしたい。だから私は、故郷の美しい自然を守りたいのだ。

大昔から受け継ぐ自然を、次の世代、もっともっと遠い未来へ繋いでいくために、私は美しい自然を守り続ける。